10

開口できない 開口しない

さまざまな原因により開口してもらえない、あるいは開口が困難な状況としては次のような場合がある.

- ① 意識障害があり、自力で開口できない。
- ② 廃用症候群が進行したために顎関節の拘縮があり、開口できない(疾患による開口障害).
- ③ 認知症や過敏のためにケアを拒否して開口しない(拒否行動や過敏反応).

ケアのポイント

開口ができない場合には、筋緊張が高くなっていることが多いので、肩や頸部、顔面をほぐしていくとよい、開口を促すためには、

まずリラクゼーションや顔面のマッサージを行ってから口腔に触れる(図 4-26). そして, 患者の負担にならない手技や器具を用いて開口させ, 開口後は開口補助用具を使用すると便利である(p.68,69参照).

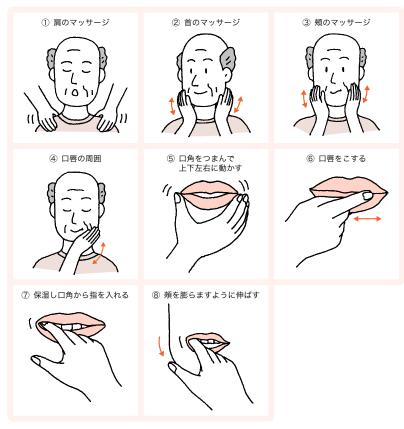
どのような状況でも、安全で快適なケアができるように留意し、つねに声かけし、コミュニケーションを図り、リラックスできるように心がける.

顔面に触れたときに嫌な表情を示す場合は過敏が疑われるので、脱感作を行い、徐々に慣れさせてから口腔清掃を行う、脱感作は、口腔から離れたところから触れはじめ、徐々に口腔に向かうようにする、口腔内では、前歯部は敏感なため、臼歯部の歯肉から触れるようにする、過敏がない場合には、リラックスするようにマッサージを行い、筋肉をほぐし、開口を促していく(p.111、コラム参照)。

開口の方法には、下顎を押し下げたり、Kポイントを刺激する方法がある(表 4-4、図 4-27)、無理な開口は、症状を悪化させることにつながるので注意する。開口保持や誤って咬まれることを防止するためにバイトブロックや開口器を用いるが、用意できない場合には、割りばしにガーゼを巻いたもので代用する方法もある。

● 表 4-4 開口を促す方法 ●

状 況	方 法
唇に力が入っている	リラクゼーション後,口唇にワセリンを塗り,口唇の 力が緩んだら口角から指を入れ,脱感作を行う
くいしばりが強い (歯の欠損が多くみられるとき)	リラクゼーション後、歯が欠損している部位を利用 し、隙間からスポンジブラシなどを入れて行う
意識障害があり、自力で開口できない	リラクゼーション後、下顎の歯列に沿って指を入れ、 歯列と平行になるようにあて、下顎を押し下げる (指全体を使うようにして均等に力をかける)
咬反射が強い	下顎の歯列に沿って指を入れ、K ポイントを刺激して 開口を促す



いきなり口腔内に手を入れると抵抗を示すことがある。 緊張をほぐすための声かけをしながら、口腔に遠い部位から触れてリラックスさせる。

● 図 4-26 リラクゼーション ●



■ 図 4-27 Kポイント刺激

148 4 ロ腔環境とオーラルヘルスケア 149